

説教 『 息を吹きかけて遣わす 』

小河信一 牧師

ヨハネによる福音書 20章19節～23節

聖霊の働きは、初めの時にすでに開始され、中心〈十字架と復活〉の時に恵み深く現され、そして、終わりの時に至るまで継続すると、私たちは信じています。

初めの時、神は神の霊によって世界を創造し（創世記1:2）、命の霊を吹き込んで人間を造られました（創世記2:7）。その後、神は救いの計画を、イエス・キリストの〈十字架と復活〉の出来事によって成し遂げられました。その際、神の霊は、聖霊の降り注ぎというかたちで人々に現されました。人々は聖霊の導きによって、イエスがキリスト、すなわち、メシア、救い主であることを告白するようになりました。罪に引かれ、死を恐れていた人間において、命の霊が回復され、新しくされました。そして今、私たちは、終わりの時をめざして、キリストがいつも教会を守ってくださるよう聖霊の働きを祈り求めています。

本日は、クライマックス（福音の頂点）である中心の時に、聖霊の力強い働きが、復活の主・キリストと霊的危機にさらされていた弟子たちとの間に起こったことを見てみましょう。

一言でいえばこの場面で、キリストは、霊が臨在した初めの時の真実に基づき、霊のからだをもって弟子たちに現臨され、将来にわたる聖霊の導きを彼らに約束されました。それが、永遠の約束であり、確かなものであると、私たちが再認するために、初めの時に立ち返りましょう。

創世記2:7――

主なる神は、土（アダマ）の塵ちりで人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。人はこうして生きる者となった。

「土の塵で……命の息を……」という精巧な神の御業を土台として、人間は造られました。命の息あるいは命の霊が、その体と魂全体に行き渡らされた人間は、初めの時から霊的に「生きる者」でした。

ところが、しばしば神によって吹き込まれた霊・息吹は、人の内で衰え、

人から離れていくことがありました。そのことは、人間の寿命が尽き果てた時ではなく、むしろ、人間が神に反逆し、罪を重ねている時に引き起こされました。

詩編104:29-30——

²⁹ 御顔を隠されれば彼らは恐れ
息吹を取り上げられれば彼らは息絶え
元の塵に戻る。

³⁰ あなたは御自分の息を送って彼らを創造し
地の面を新たにされる。

ヨブ記34:14-15 エリフの言葉——

¹⁴ もし神が御自分にのみ、御心を留め
その霊と息吹を御自分に集められるなら
¹⁵ 生きとし生けるものは直ちに息絶え
人間も塵に戻るだろう。

私たちは、初めの時に神からアダム(人)に吹き入れられた命の息・霊が、私たちの内に粘着して離れなければよいのにと思うかもしれませんが。しかし、「風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである」(ヨハネ3:8)との主イエスの教えの通り、私たちが「思いのままに」に聖霊の働きを支配することはできません。神がその息を取り去れば、人間は再び死せる物質に戻ります(フォン ラート)。

初めの時に、神が直接、人の鼻に息を吹き入れられたように、そのように忍耐強く、神は人に霊を注ぎ込み続けてこられました。その霊の働きが、聖霊の降臨または聖霊による弟子派遣というかたちで、私たちの中心の時である主の十字架と復活の出来事において開示されました。その時、弟子たちの心身は霊の息吹が枯れ果てたような状態でした。

ヨハネ福音書20:19——

その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。

夕暮れが、神の御子をはりつけにしたという罪と死の闇を、弟子たちに思い起こされるかのように迫って来ました。カルヴァンは、神の摂理の光

のもとに、この場面を描いています。

「みんな(=ユダはもちろんトマスを除く弟子たち)が同じ一つの場所(エルサレムの某家)に集まっていたのは、神の確かな摂理なしには起こらなかったことである。……(中略)……弟子たちをどっちつかずの状態にとどめておいたのは、夕刻まででしかなかった。それに、世が暗黒の闇におおわれてしまった時に、彼らを照らして、新しい命の保証をもたらしたのである。」

ヨハネ福音書に拠れば、この家にいたペトロともう一人は「空の墓」を目撃していました(ヨハネ20:5-8)。さらには、マグダラのマリアから「わたしは主を見ました」と告知されていました(ヨハネ20:18)。それにもかかわらず、信仰の要である主イエス・キリストの復活について、彼らは「どっちつかず」の態度でした。神が勝利したにもかかわらず、まだ彼らの魂の内に、光は輝いていませんでした。今、週の初めの夜の暗黒が彼らを呑み込もうとしていました。

自分を顧みれば、事柄を「どっちつかず」に放置することが多いのですが、神の目からその人の内側を見るならば、疑い深く、不安定で、荒れずさんでいることは明白です。

主イエスは、平静を装いながらも、実のところ荒れ狂っている弟子たちの魂に、「平安あれ」との挨拶を二度送り届けられました(ヨハネ20:19,21)。そうして、皆が平和の挨拶を受けるとともに、「イエスが来て真ん中に立ち」ということによって、主イエスを中心にした弟子たちの交わりが形成されました。

それから、主イエスは彼らに、「手とわき腹とをお見せに」になりました(ヨハネ20:20)。

鍵のかかった家の部屋に、透明になってすり抜けたかのごとき「奇跡」をもって、すなわち、「身体からだのよみがえり」をもって入って来られた主イエス・キリスト……まさにその「身体」は神の永遠性を現すものでした。完全無欠であったはずです。あえて譬えるならば、赤ちゃんのように無垢な身体であったように思われます(参照：列王記下5:14、ヨブ記33:25)。

ところが、「弟子たちは、主を見て喜んだ」(ヨハネ20:20)というその主の身体は、何よりも、主イエスが十字架の死からよみがえらされたことを指し示していました。この場面では詳述されていませんが、「この指を

釘跡くぎあとに入れて……」や「この手をそのわき腹に入れて……」(ヨハネ20:25)という主イエスからトマスへの語りかけにおいて、十字架の苦難や傷跡が主のよみがえりの身体に残されていたことが昭示されています。それは、神がすでに苦難の僕において預言されていたことであり、その〈言葉〉が今や〈出来事〉として成就したのです。

イザヤ書53:5——

彼の受けた懲らしめによって

わたしたちに平和が与えられ

彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。

弟子たちは、十字架から復活へという救いの出来事を「喜んだ」のです。つまり、それは、罪と死の虜とりこになっていた自分たちが、神の憐れみによって救われたことを喜ぶというまことの歓喜でした。

主イエスは、弟子たちが喜びをもって救いを信じ続けるようにと、彼らをとりなし慰められました。

ヨハネ福音書20:22——

そして、こう言われると、(イエスは)彼らに息を吹きかけて言われた。

「聖霊を受けなさい。」

これは、初めの時に、人間が神から授かった幸いなる出来事、「主なる神は、(アダムの)鼻に命の息を吹き入れられた」ということに通じています。つまり、主イエスが、神に対する人間の反逆や無関心によって、いったん神が取り去られたその息・霊の回復を約束されたということです。天地創造以来、これまでの霊の働きが、イエス・キリストの十字架と復活を思い起こさせる聖霊の働き(ヨハネ14:26)において全く新しいものにされました。

主イエス・キリストの〈行為〉「彼らに息を吹きかけて」と〈言葉〉「聖霊を受けなさい」が弟子たちに向けられて、そこに、弟子たちが新しいものに造り変えられるという〈出来事〉が生じました。彼らは主の復活を信じ、直前まで死んだも同然だった彼らが「こうして生きる者となった」(創世記2:7)のです。

御子、イエス・キリストの十字架と復活によって現された神の栄光が、弟子たちに迫っていた夕闇を、とりわけ、彼らを絶望の淵に陥れようとしていた罪咎つみとがを取り去りました。

ペトロの手紙 — 2:9——

しかし、あなたがたは、選ばれた民、王の系統を引く祭司、聖なる国民、神のものとなった民です。それは、あなたがたを暗闇の中から驚くべき光の中へと招き入れてくださった方の力ある業を、あなたがたが広く伝えるためなのです。

この箇所の最後に「あなたがたが広く伝えるため」と記されている通り、主イエスは、罪の赦しという主の務めを弟子たちに担わされ、彼らを派遣されました。

ヨハネ福音書20:21――

イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」

神による派遣という点で、御子、イエス・キリストと弟子たちの間に、何ら差違はないということが述べられています。主イエスの為されたガリラヤ湖畔、異邦の地、そしてエルサレムなどの伝道のワンランク下に、弟子たちの伝道や私たちの伝道が置かれているのではありません（参照：ナホム書2:1、ローマ10:15）。

「御父によるイエスご自身の派遣は、イエスが弟子たちに与える使者の務めの依って立つ根拠である。この務めに対する弟子たちの装備は、聖霊である。」（A.シュラッター）

弟子たちの託された派遣・伝道は、その根拠も装備も万全です。

ヨハネ福音書20:23――

「だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

主イエスが、弟子たちの伝道について明確に述べられています。ここで、「罪は赦される」に対置されているのは、「罪は裁かれる」ではなく、「赦されないまま残る」（罪が留保されている）となっている点に留意したいと思います。私たちが、主イエスが罪人を赦されようとしていることを告知するにあたっては、相当の忍耐と寛容が必要です。今すぐに、人が他の人の罪を赦すか、あるいは、その罪を裁くか、決めるとするのは、まさに悪魔の誘惑です（参照：マタイ13:24-30 毒麦のたとえ）。主イエスは弟子たちを「（罪が）赦される」人々に向けてのみならず、「（罪が）赦されないまま」人々のかたわらにも派遣されています。

ヨハネの黙示録11:11――

三日半たって、命の息が神から出て、この二人（の証人）に入った。彼らが立ち上がると、これを見た人々は大いに恐れた。

ヨハネ福音書につらなるヨハネの黙示録にある終わりの時の、一つの出来事です。

この説教の最初に、「私たちは、終わりの時をめざして、キリストがいつも教会を守ってくださるように聖霊の働きを祈り求める」ということを記しました。私たちが聖霊の働きを信じるとは、「命の息・霊が神から出て、人に入る」という出来事を信じることではないでしょうか。聖霊の力によって生きるとは、私たちの業ではなく、ただひたすら神の恵みです。

聖霊の風は、きのうも今日も、また永遠に吹き巡っています。終わりの時をめざして、私たちは、神の息吹の吹き込まれた、息あるものとして、主を賛美し続けたい（詩編150:6）と願います。

讚美歌 312番——

いつくしみ深き 友なるイエスは、
罪とが憂いを とり去りたもう。